

# 捨てる物に命吹き込む



残りかすを使ってできたボウル。原料はコーヒー  
一(手前右)、木くず(同左)、茶(奥右)、  
おから(同左)=いづれも名古屋市東区で

コーヒーかす、茶葉 ▶▶ ボウル

れる。国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）に、ごみの量を大きく減らすなどの「つかね責任」が盛り込まれていることもあり、注目が高まっている。

タピオは、コーヒーかすなど食品や材料のさまである残りかすを店舗や工場から無料で回収。提携会社の専用工場でボリュームなど石油由来の成分を混ぜ、三一四〇の粒状の合成樹脂「ペレット」を作る。溶かしてコーススター やボールペン、ポウルやフライイングディスクなどの金型に流し込み、冷まして成形。残りかすの排出元の店舗や工場に買い取つてもらう。

コーヒーかすのほか、抽出後の茶葉、ビール製造に使った後の大麦、豆腐作りで出たおから、バツト工場

「不用になつた物を付加価値のある別の物に作り替える「アップサイクル」の取り組みが、東海地方の企業で広がりを見せてる。販促品の製造を主に手掛ける名古屋市東区徳川の「タイヨー」は、ドリップ後の「ヒーヒーかすなど」をコースターやボールペンに作り替える事業に乗り出だす。同社の担当者は「捨ててしまつ物に再び命を吹き込めたら」と話す。(戸川祐馬)

(戸川祐馬)

アップサイクルという言葉は、二〇〇〇年代に入つてから米ニューヨークで生まれたとされる。「アップサイクル」に機能や価値を高めるという意味を込め、リサイクルフレーリューム

を指す

タリミーがこうしたツップサイクルの取り組みを始めたのは一年ほど前。同社エシナル事業課長の伊藤敦さん

伊藤さんは「捨てる物を生して『第二の人生』をくれば」と思い付いた。

東海の企業で「アップサイクル」



コーヒーの残りかすからできたコースターを手に、アップサイクルの仕組みを説明する平林康徳社長

(五〇)が、よく行くカフェのマスターから「こだわった

売所では使用後の大麦を入手。通りがかりの竹やご

トにしていき、作り替える仕組みを確立した。

豆なのに、一回使つただけで捨てるのはもったいな

で、竹を切っている地主に頼んでもうつてることも

(四)は「工場や店舗から出

樹脂「ペレット」を作る。  
溶かしてコースターーやボーラー、  
ルペーン、ポウルやフライイングディスクなどの金型に流し込み、冷まして成形。残りかすの排出元の店舗や工場に買い取ってもらう。

ついでに、この「つかう責任」が盛り込まれていることもあり、注目が高まっている。

「アッパサイクル」  
葉は、二〇〇〇年代に入り、から出た木くず、竹炭を粉末にした灰も活用できると  
てから米ニューヨークで生まれたとされる。「アッパサイクル」に機能や価値を高める  
という意味を込め、リサイクルやリユースとは区別さ  
れる。国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）に、「みの量を大きく  
（金）が、よく行くカフェのマスターから「だわった豆なのに、一回使つただけ捨てるのはもったいないと聞いた。同社は企業い」と聞いた。

タヨーが、こうしたアッパサイクルの取り組みを始めたきっかけとなつたのは一年ほど前。同社エシカル事業課長の伊藤敦さんは「捨てる物を再利用して『第二の人生』をつくれたら」と思い付いた。

カフエから「コーヒーを譲つてもいい、行きつけのクラフトビール製造・販